

昭和 43 年 3 月卒業機械・生産機械工学科合同の同期会（機械系 39 会）報告

大学というところはクラスも大きく、卒業後は国内外に分散するためクラス会などはほとんど開催されず、会社組織や在学時の小グループでの交流だけに留まることが多いようです。我が機械工学科と生産機械工学科も卒業以来半世紀近くなるが一度も開かれていなかったが、どこからともなく皆定年を迎える年頃になってあいつの消息は？などとの声が高まり、初めて合同の同期会が開催されました。

表記機械工学科と生産機械工学科（学科改組により残念ながら我々が最後の卒業生）は、昭和 39 年 4 月の入学から卒業まで学科名は別ですが、学生は合同の授業を受け、4 年時の卒業研究も一体化して機械系各研究室に分散し同じ釜の飯を食いながら卒業論文を作成した仲間だったので、合同での同期会開催ということになりました。

幹事（14 名）会を 2 回開催し、準備万端でしたが参加者は思惑より少ない 43 名（末尾集合写真）でしたが、参加された方は皆さん昔に戻り、思い出を語りながら楽しい時を過ごされたと思います。なお卒業後の年数も経ち教授の先生方も残念ながらほとんど亡くなり、本当に手取り足取りご指導いただいた当時若かった講師や助手の方も、研究室によりどなたを招いても難しいので卒業生だけの集まりとしました。

2014 年 6 月 14 日（土）JR 信濃町駅アトレ内「ジョン万次郎」にて受付がはじまり、「同期の桜」達が集まりだしました。約半世紀ぶりの集まりで名前と顔も一致しないだろうからと名札を用意したので、あちこちで「〇〇君か、久しぶり！何年ぶりかな？」といった声が飛び交いました。風貌は紅顔の美青年とは大分かけ離れた「厚顔の髪の毛も少なくなった壮年（老年？）」となって貫録のついた者もいましたが、心は学生時代のままで「おい、お前」で呼びあう姿も見受けられました。

定刻 11:30、一番目のイベントである発起人広橋（加藤）光治君（現；千葉大学名誉教授）の「大学は今？／壊れないものは作れない」という講演が始まりました。同君はムサコーから国立大学の教授になった数少ない卒業生で、彼の経験から現職では語れない昨今の①大学裏事情（教員組織、教員・研究者の評価、学生の意識、・・・）、②壊れないものは作れない（破損・事故事例紹介）、③安全策（安全安心なものづくり）等の話題提供に、皆真剣に耳を傾けていました。特に、大学は何故学部名や学科名を頻繁に変えるのか？理化学研究所の不正？は、現在研究者の評価が短期的に評価され、任期を設けた採用であるために発生した・・・など、同君が現職を離れたが故に本質が語られたものと推測します。後半では日本は資源貧乏国であり、科学技術立国として「人作り」が重要であるといったことは、我々の学生時代も同じであったが、現在の学生達は目的意識も乏しく、また教員も超多忙で学生への指導が正直行き届いてはいないのでは・・・と懸念しており、また我々の身の回りは全て人工物であり、人工物は扱いを誤れば、必ず壊れる（原発も）ことを考慮して、少なくともモノ作りにかかわる工学部出身者は技術者倫理を守ることが大切であると結ばれました。

続いて第 2 部の懇親会は浜谷堅蔵君の司会により、まず物故者 13 名のご冥福を祈って黙禱した後、北海道弟子屈町からはるばる参加した須藤直武君による乾杯、しばしの歓談、そして二番目のイベントである浜谷君によるマジックショーが始まり、トランプやハンカチーフ、ステッキを使った奇術を披露していただきました。彼は学生時代すでにセミプロ的存在であったが、さらに腕が上がって（洗練された）テレビ等にも出演している第一線の方で、皆楽しく観賞しました。続いて研究室毎および学科別の集合写真を撮り、本会に「機械系 39（サンキュウ）会」と名称を設け、また次回は 7 年後（大多数が喜寿となる？）

の2021年6月12日(土)再会と決め(場所は未定)、それまで皆さん健康で長生きすることを約束し合いました。最後に空手部だった古来一男君の音頭で校歌を斉唱し、長時間に渡る会もあつという間に散会(午後3時)となりました。なお、参加者は別れを惜しんでその後三々五々近隣の居酒屋や喫茶店に寄られたようで有意義な同期会でありました。

末筆ながら住所録の作成にあたりご協力いただいた同窓会事務局の方や幹事の皆さんに感謝します。

(文責;山田弘道)

